

# 私学の魂

かえつ有明中・高等学校

## グローバルな視野と論理的思考で、 未知の未来を生き抜く力を育て、 生徒の夢を広げて自己肯定感を高める、 かえつ有明の新たな“学びのビジョン”

「共学だけど授業は別学」、「在校生の5人に1人が帰国生」、「21世紀型教育推進校」等々、多彩な教育の特色をもち、多様なバックボーンをもつ生徒たちが集う、かえつ有明中・高等学校。千代田区的女子校であった嘉悦女子中高が、現在の江東区有明の地に移転してから10年目を迎えた今春、現理事長の嘉悦克先生から校長職を受け継いだ石川一郎先生が新校長に就任しました。昨年8月に2020年東京オリンピック・パラリンピックの誘致～開催が決まり、この豊洲～有明エリアがその会場の中心地として、世界的な“グローバル・ゾーン”となることが決まった翌年のことでした。

そのかえつ有明中学校は、この2～3年、独自のグローバルで先進的な教育展開が注目されて中学入試でも人気を高め、さらに新たな教育プログラムを導入して、そうした教育を望む受験生と父母を惹き付ける求心力を強めています。帰国子女だった自らの経験も生かして、生徒の誰もが自己肯定感を持てるグローバルで多様（＝ダイバーシティ）な教育環境をつくることを願う石川一郎新校長のもと、着々と改革を進める同校の教育について、今回はお話を伺いました。



校長 石川 一郎先生

### かえつ有明中・高等学校

DATA  
1

沿革 1903年 嘉悦孝が日本で始めて女子を対象とした私立女子商業学校を設立。  
1996年 英国・ケンブリッジ大学敷地内に「嘉悦ケンブリッジ教育文化センター」を竣工。  
2006年 かえつ有明中・高等学校と改称。有明キャンパスに新築移転し共学化へ。  
2007年 帰国生プログラムスタート。  
2010年 ケンブリッジ研修スタート。  
2012年 セメスター留学制度設立。  
2013年 創立110周年。「共学だけど、授業が別学。」での学びをスタート。  
2014年 高校募集スタート。

校長 石川 一郎

所在地 東京都江東区東雲 2-16-1  
TEL：03（5564）2161  
<http://www.ariake.kaetsu.ac.jp/>

交通 りんかい線「東雲」駅より徒歩約8分。東京メトロ有楽町線「辰巳」駅より徒歩約18分。同「豊洲」駅よりバス約10分。

## オルセースクールミュージアムが象徴する かえつ有明のめざす“感性教育”

取材に伺った8月26日(水)は、かえつ有明中高では、ちょうど「オルセースクールミュージアム」が開催されている期間中でした。このイベントは、フランスのオルセー美術館から唯一認可されたリマスターアート(超精細複製画)を学校内に展示し、在校生や保護者など学校関係者だけではなく、近隣のご家庭や美術に関心のある方に見てもらおうという企画で、私立学校の門戸を外に向けて開き、私学の雰囲気に触れてもらうためのイベントでもありました。

そうしたユニークな企画を、昨年8月に国内の私学では最初に実現したのが、このかえつ有明中高でした。昨年までは副校長だった石川一郎先生が、これまでめざしてきた理想の教育に欠かせないもののひとつ「感性を育む教育」を大切にしていきたいために、生徒にこうした世界的な美術・芸術作品に身近に触れさせたいという願いを込めて、当時の嘉悦克校長(現理事長)の理解を得て、開催が実現したのがこの「オルセースクールミュージアム」だったのです。

「本校では、論理的思考やクリティカルシンキング(批判的思考)の力を育てることも大切にしてきましたが、一方では感覚的に『何となくこれが良いのでは?』と感じて受け入れる力も大事だと考えています。そういう感性を育てるためにも、この多感な10代の時期に美術・音楽といった芸術に触れさせたいと考えています」と、今春、新校長に就任した石川一郎先生は言います。

この「オルセースクールミュージアム」の期間中に、来場者への絵の解説を務めたのは、同校のアート(美術)部を中心にしたボランティアの中1~高3の有志約20名。この生徒による親切的な解説と案内が、昨年の初回から来場者には大好評でした。

「なかには、この経験をきっかけに美術系の大学への進路を希望するようになった生徒もいます。また、ちょうど夏休みだった開催期間中には、サッカー部の男子やマーチングバンド部をはじめ、いろいろな部活で登校していた生徒が、練習帰りに展示を見に来て、その後も毎日来ては数名で模写をしたりして絵画に親しんでくれていたのも嬉しかったですね」と石川先生。

思春期で照れ屋も多い男子生徒も、何度か足を運ぶうちに「自分も模写してみたい」と思ったのでしょうか。スポーツや音楽などの部活に励む一方で、学校生活のなかでこうした美術にも身近に触れ、関心を持てるというのは、とても素敵なことではないでしょうか。



生徒が芸術と触れ合い、生徒が美術館員を務める「オルセースクールミュージアム」は、かえつ有明のリベラルアーツ教育を代表する催し。

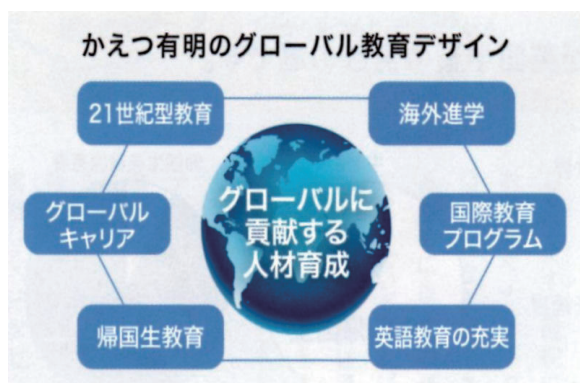
## 「I Think... Because...」と 自分の意見を伝えられる 論理的思考と表現スキルを身につける

かえつ有明中学校は、この2~3年の中学入試で大きく人気を伸ばしていて、なかでも帰国生入試では2年連続で都内の私立中学校では最多の志願者を集めています。人気上昇の理由はどこにあるのでしょうか。

「社会が変わり、大学入試が変わるなかで、中学・高校の教育も変わらなくてはいけないと私たちは考えてきました。たとえば日本の企業も、グローバル化の流れによって、従来のやり方や方法論では立ち行かなくなり、変革が求められています」

そのなかで、この先の未知の世界を生きていく、これから子どもたちに何が必要なのかを考え、教育内容や教育の質を変えていくことが学校の課題であると、かえつ有明では考えました。その答えが「“学びが変わる”」ことによって“学び方のアプローチ”が変わることだと石川先生は言います。

“学びが変わる”とは、未知の世界を生きるための「考



え方の基本」を身につけること。“学びのアプローチが変わる”とは、子どもたちの個性を生かし、多様化する社会で共生できるマインドを育成すること。この二つの視点で、未来を生きる子どもたちのための教育を実践していくことを同校は宣言しています。

その「考え方の基本」とは、「ものごとを論理的に捉え、他者を説得できること」と「異文化を理解できる語学力と教養を身につけること」です。いまマスコミでも盛んに報道されている「2020年大学入試改革」に象徴されるように、グローバル化の影響により大学入試にも変化が見られます。これからの子どもたちが生きていく社会では、世界の人々と「協働」していくことが求められています。それは現在の小学生の保護者の多くが、すでにご自身の仕事や生活のなかでも痛切に感じていることでしょう。

現在の小学生（中学受験生）が、今後まさに直面する大学入試では、単なる知識の詰め込み型の学習では解答できない問題が出題される（すでに出題され始めている）こととなります。こうした状況のもとで生きるスキルを身につけるためには、「学び」のスタイルが変わらなくてはならないと、かえつ有明では考えているのです。

そうした「論理的な思考力の育成」と「知識を超えた教養の習得」を、かえつ有明では、“サイエンス”と“リベラルアーツ”と名づけたプログラムのなかで育てていこうとしています。

「論理的な思考力」を身につけるための、かえつ有明の独自の教科横断型カリキュラム“サイエンス”では、グローバル社会では、自分が理解しているだけではなく、相手にも理解してもらうことが重要という考えに立って、知識と知識をリンクさせ、他者にわかりやすく伝えるスキルを養います。

その「論理的な思考力」を培うベースは、「クリティカル・シンキング」。情報を単に受け入れるだけではなく、正確に捉えて意見と事実を区別し、常に論理的かどうかを考えさせるトレーニングをしていきます。全教科が連携したオリジナルコンテンツと教材を使って、教科・授業を関連させた実践的な授業を行います。「答え」ではなく「答えを導き出すためのプロセス」を磨くことが“サイエンス”の授業のポイントです。ここで学んだことは、大学入試への対応力だけではなく、社会に出たときに役立つ基本スキルです。

同時に、これからの時代は、論理的に英語で自分の意見を言える能力が必要とされています。そこで、かえつ有明では英語の授業で“ランゲージアーツ”を身につけていきます。幅広い教養を身につけて、英語というツールを有効に使っていくために、帰国生や留学



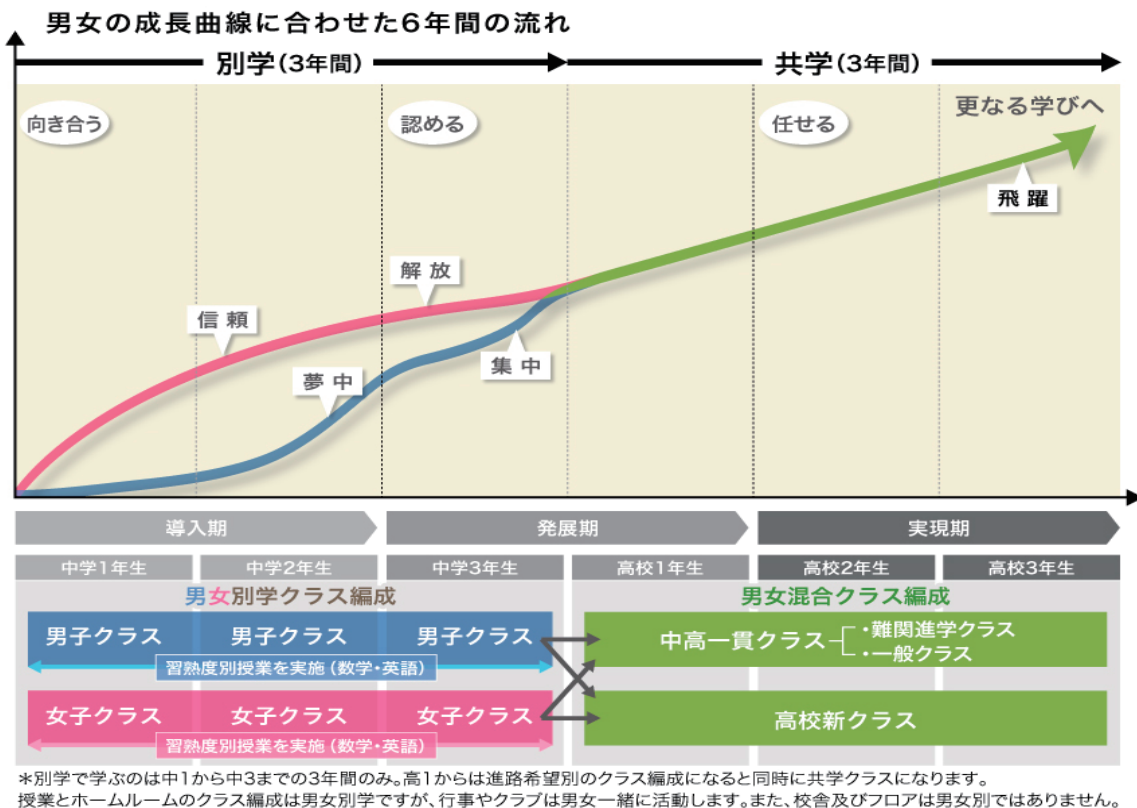
帰国生向けに行われるダッツン先生の「TOK型（哲学）授業」では、それぞれの生徒の発言・意見が引き出され、全員の思考や気づきが広がっていく。

生と交わる協働の授業や、海外体験を通じてあらためて日本と海外を知ることで、単なる知識を越えた教養の習得をめざします。英語が話せるだけではなく、自分の意見を相手に伝え、英語でディスカッションができるようになるために、クリティカルな視点を持って、英語で世界の人々と「協働」できるスキルを育てていきます。

## 「共学だけど授業は別学」という ユニークな授業形態と 「21世紀型学習スタイル」で、 積極的な参加型授業を実現

かえつ有明中・高等学校が、かつて女子校であった嘉悦女子中高を共学化し、現在の校地に移転して、新たな校舎とキャンパスで共学の進学校として再スタートを切ったのが2006年。そして2013年からは、中学～高1の4年間「共学だけど授業は別学」という、首都圏の私立中高一貫校でも唯一のユニークな形態での教育に踏み切りました。また、同時に「21世紀型学習スタイル」と呼ばれる新たな教育・学習の手法を導入して、新世代の私立中高一貫校としての歩みをスタートさせています。

中学の3年間は、男女の成長差が著しく、人生のうちで最も多感な時期。一方でこの時期の生徒は、ものごとを率直に捉えることのできる素直さを持っています。こうした時期に生徒一人ひとりの個性を尊重し、自発的に物事に取り組む姿勢と、多様な人々と積極的に交わる精神を培うことが重要であると考え、かえつ有明では、この時期に相応しい「一人ひとりの個性を生かした学習指導」と「積極的な参加意欲を喚起する授業」という、新たな“学びのアプローチ”を導入し、



子どもたちの学習効果と積極的なマインドを高める教育を推し進めてきました。

この時期、女子に比べてやや精神的に子どもっぽい男子には、競争や挑戦の意欲を刺激し、自分なりの創意工夫をしてチャレンジと失敗、成功を繰り返して達成感を得ることで、大きな夢を描けるような学習指導のサイクルを重ねることで成長を促します。

逆に男子よりもちょっと大人で背伸びしがちな女子には、一人ひとりが大切にされ、認められていると感じられるような安心感のある関係のもとで、手に届く目標を持たせ、コツコツと学習して自分で納得し、一つひとつ段階的に学び、できたことを褒められる達成感と信頼関係を大切にすることで、着実な成長をサポートしていきます。

この別学教育の効果は、こうして男女それぞれに合った教育プログラムと学習サポートの工夫が可能になり、学習意欲と効果が向上すること、生徒は男女を意識せずに伸び伸びした環境で過ごせること、そして教員は、一人ひとりに合わせて個性を生かしながら、細かく適時な教育ができることで、生徒自身の「つまづき」は最小にし、「踏み出し」は最大にすることが可能になると、かえつ有明では考えています。

## 日本の教育改革がめざす 新たな学びのスタイルを、 「TOK・PIL・PBL」型の 21世紀型授業でリードする

そして、かえつ有明中学・高等学校では、いま文部科学省が「2020年大学入試改革」と並行して推し進めようとしている日本の教育改革の課題に掲げた「アクティブラーニング」の導入を、すでに他の公立学校や私立学校をリードする形で実現し、手ごたえと成果を伸ばしつつあります。

それが、「TOK (Theory of Knowledge = 知の理論型授業)」、「PIL (Peer Instruction Lecture = 対話挿入型授業)」、「PBL (Project Based Learning = 課題解決型学習)」と呼ばれる「21世紀型学習スタイル」です。こうした問題解決・対話型授業の機会のなかで、生徒たちは自然に、自ら発信し、積極的に社会に参加するマインドを身につけていきます。

いま「2020年大学入試改革」をはじめ「英語の4技能」「ICT教育」「IB (国際バカロレア) プログラム」など、日本の教育改革の課題として挙げられているキー

ワードのなかでも、上記のような授業や「探求型」と呼ばれる授業の総称ともいえる「アクティブラーニング」は、幼児（幼稚園）教育～初等（小学校）教育～中等（中学・高校）教育～高等（大学）教育に至るまで、最も大きな課題として、教育現場への導入の成否が議論されている注目のテーマです。

この新たな授業・学習のスタイルを、すでに数年前から中高の教育現場に導入し、その手ごたえと成果が、在校生や保護者はもちろん、多くの教育・受験関係者からも認められている同校は、間違いなく「21世紀型教育」先進校のひとつといえるでしょう。

そうした、子どもたちの未来につながる「新たな学びのスタイル」の導入を着々と実現している同校の教育のスタンスに、自らもグローバル企業や海外の赴任先など、国際的なビジネスの最前線で活躍する若い世代の保護者から、年々大きな注目が集まっているということなのでしょう。

首都圏中学入試における「帰国生入試」で、2年連続で最多の志願者を集めているのも、そうした注目によるところでしょうし、自らも帰国子女として、アメリカから帰国後に当時の日本の教育環境に馴染むのに苦労したという、石川校長先生ご自身の経験も、かえつ有明の多様性を持つ新たな（帰国生にとって望ましい）教育環境を形成するうえで生かされています。

「帰国生対象の説明会などで、私の話を聞いて『ちょっと風変わりなあの校長のいる私立学校なら、意外と居心地がよくて伸び伸びと学校生活できるかも…』』とってくれる帰国生のご家庭もいるように感じています」



かえつ有明ではすでに様々な授業でアクティブラーニングが実現。この夏には全国的な研修で多くの学校の先生が同校の授業見学に訪れた。

と笑う石川先生。

今春、同校からの初めて東大（理科I類）への現役合格を果たした橋本大輝さんも米シアトルからの帰国生で、かえつ有明の在学中に中学時代はバスケットボール、その後はコンピュータのプログラミングや音楽の作曲法など、いろいろなことに挑戦したそうです。

「面白かったのはサイエンス科の授業です。リサーチをしてレポートを書いたり、プレゼンテーションをしたりしました。普段、物事を論理的に考える時、英語で思考することが多いのですが、Honors Classでネイティブの先生の授業を受けたのがためになりました。文学作品を深く読み解いてエッセイにまとめ、先生と議論した経験が、英語力だけでなく国語力を養うことにもつながり、医学部受験の際の小論文でも役立ちました。…」と橋本さんは語っています。

## かえつ有明が実践している「21世紀型学習スタイル」

	① PIL型 (Peer Instruction Lecture) ＝教え合い学習	② PBL型 (Project-Based-Learning) ＝問題解決型学習	③ TOK型 (知の理論－Theory of Knowledge) の学習
どんな授業なのか？	一般的にPIL型と呼ばれる、講義に対話を導入するタイプの授業。生徒同士の教え合い授業。	ある課題が与えられていて、その問題解決をグループで調べ学習し、意見をまとめて、グループの代表者が発表するような授業。	学際的な観点から個々の学習分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方と客観的精神を養い、論理的思考力を育成する学習。
どういう場面で 行うのか？	予習したことをもとに、互いに教え合い、学び合いながら問題を解決していく授業。	グループで協力しながら課題を解決していく授業。	「知っている」ということはどんなことなのか、議論を通して深く考える授業。
狙いは何なのか？	課題がうまく解決できない場面や、理解が深まらない場面。	解決方法が分からない課題や、一人では解決するのに時間がかかったり、知識が足りなかったりする場面。	日常のありとあらゆる場面。
狙いは何なのか？	自ら積極的に学ぶ姿勢を身に付けること。他者に教えることで、より理解を深めること。	何かを解決する時に、他者と意見交換や交渉をしたり、協力することが必要不可欠だと体感すること。	疑問を解決するために、手に入れた知識を上手に使うことができること。
どんな効果があるのか？	何が、どのように分からないのか、自分で突き止めようとすることができる。「分かったつもり」が少なくなる。	複数の生徒で問題にあたることによって、新たな発見や気付きが促される。	日頃当たり前だと思っていることでも、「なぜだろう？」という疑問を投げかけることが習慣化する。したがって新しい発見が生まれる可能性が高まる。

こうした「21世紀型学習スタイル」の授業だけでなく、かえつ有明ではふだんの定期試験の問題にも“アーツ（教養）”と“サイエンス（論理的思考）”の要素を盛り込み、2020年以降の新しい大学入試にも対応し、論理的思考力を育てるための試験として位置づけています。

また、新しい大学入試にも対応できるよう「TOEFL」の受験も奨励してきた結果、生徒のスコアレベルは目に見えて上昇し、2013年度には中1～高2生のうち57名がTOEFLを受験。最高は640点、平均は516.7点という成果（英検準1級相当が554点、2級が477点）をあげています。

異文化に触れ、肌で理解するためのホンモノの体験も豊かで、たとえば英語を4年間学習してきた高1の終わりには「英国ケンブリッジ英語研修」があり、イギリスのケンブリッジで、嘉悦ケンブリッジ教育文化センターでの滞在1週間とホームステイの1週間の計2週間で、語学学校での英語研修をはじめ、多国籍の友人との交流や、ケンブリッジ大学内での各種の体験学習などで過ごします。各自研究テーマを持って事前学習から事後学習まで取り組むのも特色のひとつです。

このほか、中1～中3ではブリティッシュヒルズでの英語研修、中3～高1では希望者によるセメスター留学、高2ではイギリス・フランスへの修学旅行、高3ではSAT対策などの各種プログラムがあり、この中高の6年間、生徒が自発的な英語コミュニケーションを促すことのできるよう、7名のネイティブ教員と帰国生である3名の日本人教員が、学校生活のなかでの自然な英会話と、英語学習のサポートをしていきます。

## 「答えのない問い」に取り組む 学習の評価のために、 独自の「知のコード」と 「ルーブリック」を開発！

そして、かえつ有明では今春、同校が推し進める「21世紀型教育」の新しい学びと密接な「答えのない問い（＝オープンエンドの問い）」に対して、これをテストや評価をするうえで欠かすことのできない指標として、独自の「知のコード」と「ルーブリック（Rubric＝学習到達度を示す評価基準）」を開発し、従来の評価方法では測れない、新たな評価基準の活用をスタートさせました。これは、問題解決型授業の成果を教員と生徒の間で共有することによって、生徒が探求に挑んでいくときの知のチャートの役割を果たすものです。

これらの評価指標は、文部科学省が推し進めるアクティブラーニングでも本来は欠かせないものといわれ

◎かえつ有明「知のコード」

	論理	倫理	美学
離	批判-創造	脱慣習段階	自己-世界
破	分析-統合	慣習段階	自己-社会-自然
守	知識-理解	前慣習段階	自己-他者

リベラルアーツ＝感性教育

ていますが、現時点でこうした評価方法を実際に教育現場に取り入れている学校は、まだ私立中高一貫校のなかでも数えるほどしか存在しません。

生徒が学習へのモチベーションを高めて自発的に学ぶことができ、わが子が目を輝かせてそうした新たな学び（＝授業）に取り組む姿に保護者も感動し、さらに期待を寄せる。そんな「21世紀型学習スタイル」の教育を先駆的に推し進める、かえつ有明のユニークな「リベラルアーツ＝感性教育」への期待と成果は、今後ますます高まっていくことが予想されます。

そして、そうした新たな学びと大学受験の成果（大学進学実績）は、決して矛盾することなく両立できるものであることを、同校の今春の実績がすでに証明してくれています。

「はるかなものにあこがれて、私はどこまでも歩いていく」は、かえつ有明の校歌「はるか」の一節。ここに謳われた「はるかなもの」とはどのようなものか？

これについて石川先生は「人は生まれながらにして必ず何かの才能が与えられている。人生の務めはその才能をみつけて世の中に貢献することである」という言葉を例に挙げて、「それこそが『はるかなもの』だと考えています」と語ってくれました。そしてその「はるかなもの」に出会うためには、第一に「学ぶこと」、第二に「多種多様な人と出会うこと」、第三に「感謝の念を持つこと」だと語っています。

そんな「グローバルな視野と論理的思考で、未知の未来を生き抜く」創造力を育ててくれる、かえつ有明の歩みと今後の成果に大いに注目したいところです。

### 2015年 卒業生大学合格情報

東京大・東京工業大  
をはじめとする 国公立 合格 9名

早稲田大・慶應義塾大  
をはじめとする 早慶上理ICU 合格 63名

慶應義塾大医学部  
をはじめとする 医学部 合格 7名

GMARCH以上 合格 198名

今年度スーパーグローバル大学トップ型に42名合格!!